

第495回福島医学会学術研究集会 シンポジウム抄録

「新型コロナウイルス感染症パンデミックにおける
『あいまいな喪失』とレジリエンス」

日時：2022年3月12日（土） 13:00～16:00
オンライン開催

令和4年3月12日、福島医学会主催で「新型コロナウイルス感染症パンデミックにおける『あいまいな喪失』とレジリエンス」というテーマで学術研究集会シンポジウムを開催した。

【1】開催概要

【日時】令和4年3月12日（土）午後1～4時

【主催】福島医学会

【共催】一般社団法人日本家族療法学会, JDGSプロジェクト, 文部科学省補助金事業「課題解決型高度医療人材養成プログラム」, 東北大学・福島県立医科大学『コンダクター型災害保健医療人材の養成プログラム』市民公開シンポジウム

【開催形態】Zoom ウェビナーによるオンライン配信

※後日3月18～21日にオンデマンド配信

【参加者数】当日参加者：811名（うち福島県内132名）

オンデマンド（再視聴）参加者：203名

【2】プログラム

1) 話題提供「あいまいな喪失の理論と介入～災害支援における示唆～」

福島県立医科大学 瀬藤乃理子

2) 特別講演1「パンデミックにおけるあいまいな喪失とレジリエンス」(録画・同時通訳付き)

ミネソタ大学名誉教授 Pauline Boss 博士

3) 特別講演2「『さよなら』なき別れ～問題の深さと問われる死生観～」

ノンフィクション作家 柳田邦男氏

4) 討論

座長：福島県立医科大学 前田正治

シンポジスト：柳田邦男氏

瀬藤乃理子

【3】内容

1) 話題提供「あいまいな喪失の理論と介入」

東日本大震災以降、日本に導入された Boss 博士が提唱する「あいまいな喪失の理論と介入方法」について、事例の具体的な支援をまじえて解説した。「不明瞭なまま継続し、解決や終結がみえない喪失」と定義される『あいまいな喪失』は、行方不明者家族に代表される「タイプ1」（生きているのか、いないのかが曖昧な状態）と、認知症の患者家族に代表される「タイプ2」（その人はいるけれど、以前のその人とは全く変わってしまった）、がある。福島では、東日本大震災の原発事故による避難と帰還により、「ふるさとの喪失」という文脈の中で、「自分の故郷はどこなのか」「故郷の町はすっかり変わってしまった」といったトラウマ的なあいまいな喪失が生じた。Boss 博士は、このような状況では「悲しみに終結はない」「レジリエンスを高めることが大切である」と明確に示しており、支援者はそれを前提に支援することを勧めている。このパンデミックにおいても、行く先の見えない状況の中で、多くのあいまいな喪失が生じているとして、Boss 博士が今年（2022年）にまとめられた「The Myth of Closure（終結という神話）」という本を紹介した。

2) 特別講演1「パンデミックにおけるあいまいな喪失とレジリエンス」

Boss 博士の講演は、インタビュー形式で実施され、「パンデミックのあいまいな喪失について、新しい考え方はあるのか」「そのあいまいな喪失には『終結』は訪れるのか」「それによるストレスを、私たちはどのように和らげれば良いのか?」「レジリエンスを高めるための具体的な方法とは?」という4つの質問に対して、スライドを用いてわかりやすく説明された。

パンデミックにおいては「生き方」「安全」「健康」といった人の基本的なニーズに関わる多くの面にあいまいな喪失が起こっているほか、「収入」「仕事」「貯蓄」など、より明確な喪失も複合している。これらの喪失は、個人のみならず、家族システムにも大きな影響をもたらしているが、時が経過してもこの喪失や悲しみに「終結はない」と Boss 博士は明言された。その上で、その中でも「レジリエンス」を高めることはできると述べた。そして、そのための具体的な方策として、A and B thinking という弁証法的な考え方、即興やアート、耐性を高めること、パ

ラドックスの不条理を受け入れることなどを述べ、最後に、「私たちの喪失には終結はなく、またその必要もないのである。」と講演を締めくくった。

そして、最後に福島の人々など幾重もの累積的な喪失を抱える人々への温かいメッセージを述べられた。

3) 特別講演2『「さよなら」なき別れ～問題の深さと問われる死生観～』

柳田氏は、これまでの豊富な取材経験をふまえて、突然の人生の切断を「さよならなき別れ」としたうえで、① 災害死、特に津波死、② 事故死、③ 急性病死、④ 新型コロナウイルス感染症による死を取り上げ、特に①と④に関しては、実際の取材経験から具体例を紹介した。また、「さよなら」という言葉には「さようであるならば」と「そうでなければならぬならば」の意味が内包されているとし、欧米人の別れの言葉との違いを論じた。そして、コロナ死の家族ケアとして、死と死別の尊厳のためには、コミュニケーションツールの常設システム化と、スタッフのグリーフケアを含めたケア力などの重要性を述べた。そのうえで、こうしたシステム、およびケアの視点やスキルを高めることで、亡くなった方のご遺族の心に染みる対応につながることを指摘した。また、グリーフケアとして、心の専門家の取り組みだけでなく、社会的理解と支えを進展させることが重要であると述べた。特に、偏見や差別をなくすためには、学校の教育現場での取り組みと、自治体・地域医師会などによる一般市民への啓発活動の必要性を述べた。最後に、新型コロナウイルス感染症の支援はがん医療の変遷から学ぶことができるとし、人生とは「物語る」ことであり、コロナ時代の「尊厳のある死」を迎えることができるような全人的な支援や理解が重要であると締めくくった。

4) 総合討論

総合討論では、コロナの死や自死などの「語れない死」を語ることについての話題が出た。柳田邦男氏は、ご自身の次男が自死された時のことを本（「犠牲（サクリファイス）～わが息子・脳死の11日～」）に執筆された時のことを話され、実際書く時には、大きな迷いがありながらも、自分が作家として「息

子の生きた証」を残したいという気持ちにかき立てられたこと、しかし書くことにはとても迷いがあったこと、書くことを支えてくれた人（編集者）の存在が大きかったことに触れ、語れない社会が語れる社会になっていくためには、語っても良いと許容できる文化的な状況が大切であると述べた。最近の「聞き書きボランティア」の活動などでは、末期の方やご遺族の語りを聞き書きし、それが人生の物語として文章化されることで、その人生への肯定感や尊敬のまなざしが生まれることがわかっており、語れない死に関してもそのような「物語る」ための取り組みができるかもしれない、と述べられた。また、宗教史学者のエリアーデの「indestructibility（破壊されざるもの）」という言葉について言及し、コロナ死や自死で亡くなった人たちの魂は、残された遺族の心に「破壊されざるもの」として永遠に生き続けることを強調された。

【4】参加者の感想とまとめ

参加者から自由記述による感想を募ったところ、たくさんの意見・感想が寄せられた。その多くが、非常に有意義な内容であったというものであったが、以下にその一部を紹介する。

- 先がみえない中に、道しるべを頂くことができた。また、様々な状況に通じる考え方を頂いたと感じた。
- Indestructibilityの意味をこれから考えていきたい。こころに響くシンポジウムだった。
- 親族を亡くしたことを受け入れていけそうな気がした。あつという間の3時間だった。
- 現実のあいまいな喪失に向き合っているからこそその深い考察をお聞きし、感銘を受けた。
- 今回のあいまいな喪失に関するご講演で、生きることに対する「期待と明るさ」も感じられた。
- さよならと言えない時にも、悲しみを分かち合う力が与えられた。死が差別と偏見のない社会になってくれればと心から願う気持ちが生まれた。
- 今後も同様の企画を是非お願いしたい。

以上
(福島県立医科大学医学部 災害こころの医学講座)